

M氏ノ運転シタ風景ノ記憶⑥

「もしも絵をやつてたら、おまえよりうまいと思うぞ」

父は酒に酔うと、赤ら顔でそう言つてからかつてきた。

「俺はなあ、機関車のナンバーを白ペンキで書いてたんだ。それをいつぱいの人から褒められてだんだぞ。んだがら、絵描いでも俺の方が絶対うまい」

負けず嫌いの父は、そう言つて何度も頷いた。そんな事を言われたことは一度や二度ではない。

昭和二十年の終戦間近、父は15歳、見習いとして福島機関区で手伝いをしていた。

ほとんど力仕事だつたらしいが、父にはもう一つ、白ペンキで機関車のナンバーを書くことが任されていた。その書いた文字は、D51 488、通称デゴイチ・ヨンパーパーと呼ばれた蒸気機関車である。戦争による金属不足で国に没収されたナンバープレート代わりに直に白ペンキで書くのだ。

「おまえは、本当に番号書くのうめえなあ」大人の機関士達に褒められていたらしい。

その事は相当嬉しかったに違いない。父親を小さい頃に亡くして、大人に褒められたことなどなかったのだから・・・。

そして、それは運命的言葉になった。終戦後、学校を卒業していろいろと働きながら、昭和二十八年念願の国鉄に就職。長年の機関助手を経て、僕の生まれる頃に正式な機関士になるのである。

僕の名前は「正義」。それは父の名前「正義」の「正」と、「機関車」の「機」である。